2011年11月20日　　西福岡教会礼拝　　中川憲次

説教題：　　「霊の体」

聖書：コリントの信徒への手紙一　15章42節－49節

「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、(43)蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。(44)つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。(45)「最初の人アダムは命のある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。(46)最初に霊の体があったのではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。(47)最初の人は土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。(48)土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。(49)わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。」

20世紀初頭に活躍したアメリカの哲学者ウイリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』という書物については、9月18日の「損知らず」と題した説教でも取り上げましたが、今日も取り上げさせてください。その書物の中でウイリアム・ジェイムズがトルストイの回心についての言葉を引用している部分があります。それを、まず今日は引用させてください。こうです。

「私は記憶しているが。早春のある日、私は森のなかにただ独りでいて、そのふしぎな物音に耳を傾けていた．私は耳をすました、すると、私の思いはこの三年の間つねに私が没項していたことに　－　神の問題に、戻って行った．だが、神の観念、と私は言った、この観念に、私はいったいどうして達したのか？と」

「そしてこの思いとともに、私の心のなかに、またもや生きようとの嬉しい熱望が起こってきた．私のなかのすべてのものが目を覚まし、それぞれなんらかの意味をもってきた・：・：，私の内のある声が、なぜ私は遠くばかり眺めるのか？と尋ねた。あのお方は、その方なしには人間が生きられないあのお方は、ここにおられるのだ。神を認めることと生きることとは、同一のことなのだ。神は生命なのだ．そうなら、さあ！　生きよ、禅を求めよ、神なしには生命はないであろう。……このことがあってから、私の内部でも私の周囲でも、いままでになかったほど万事がうまくはかどつた。そしてその光明がまったく消え去るようなことはなくなった．私は自殺から救われた．この変化がどんなふうに、いつ起こったか、私は語ることができない。しかし、気づかないうちに、徐々に、私の生きる力がなくなって行って、私が精神的な死の床についてしまったのと同じように、だんだんと、気のつかないうちに、生命のエネルギーが戻ってきた」。

私は自分が洗礼に導かれた日のことを思い出します。きっと御教会でも以前に証のような説教をさせていただいたことがありますが、もう一度語ることをお許し下さい。

私は二〇歳の頃、惨めな日々を送っていました。もちろん今も、何を着ても似合わない惨めな私ですが、あの頃は毎日洗い晒しの仕事着を着て、米屋でぬかにまみれて働いていました。そして、母子家庭の貧しい日々を呪っていました。多くの友達が親の援助で大学に進み、楽しく学び遊んでいる姿を横目に見て鬱々とした日々を過ごしていました。給料日は、その給料の余りの少なさに、俺の値打ちは、たったこれだけか、と情けない思いをする日でした。きっと私の顔はすさみきっていたことでしょう。そんな私に、「教会へ行ってみませんか」と声をかけてくれたのは、その米屋にやはり勤めておられた事務員さ

んでした。私はそのようにして、キリスト教の教会に導かれました。そこは大阪の場末の小さな伝道所でした。信徒も6,7人で、ほとんどお年寄りでした。その教会で、私は正に本日の聖書箇所の46節にあるような体験をさせていただきました。その教会の人々の温かく迎えてくださった雰囲気の中で、私は肉の体から霊の体に生まれ変わらせてもらいました。それまでは肉の眼で世間を見て、世を呪っていた私でしたが、教会の人々のやさしさにふれ、やさしく私を愛してくださるイエス・キリストに出会い、心の目で物事を見ることができるようになりました。なぜか。その教会に、私の居場所があったからです。世間の奴らは、自分の家族だけが大事で、いい家に生まれなかったら、人生は惨めだ。そう思い込んでいた私にとって、教会は意外なところでした。教会の人々は何処の馬の骨とも分からないみすぼらしい格好の私を、馬鹿にすることなく、やさしく受け容れてくれたのです。それは、家族が全てだと思い込んでいた私にとって、驚きでした。驚くと同時に、私のかたくなになりきっていた心は解きほぐされました。あの時、私には、これまでの肉の目に加えて、あるいは代わって、霊の目が与えられたのだと言えるでしょう。私は、まもなく、牧師に頼んで洗礼を授けていただきました。牧師夫人は「まだ早すぎる」と仰っていました。しかし、今年で42年目になりますが、私はその後、あろうことか伝道者の働きに導かれ、神様に生かされて感謝しております。受洗当時に話を戻しますと、もちろん、その後も決定的に俗っぽい私でしたが、少なくとも給料日が悲しく無くなりました。友達と比較して惨めな思いになることがなくなりました。今まで何気なく生きてきた何の変哲も無い町が、新しい様相を呈して私の前に立ち現れてきました。毎日出会うその辺のオッサン,オバハンが、すばらしいオッサン、オバハンに見えてきました。自分は素晴らしい町で素晴らしい人々と共に生きているのだと、心の底から喜びがこみ上げてきました。別に回りが変わったわけではなかったのに、私の心の目にはそのように映ったのです。私はたしかに生まれ変わったのです。

霊の体に変えられた人の生活は、日々新たです。如何なる困難がその人を襲おうとも、その困難の直中で活き活きと生きることができます。素敵なあなたとは、正にそのような、生まれつきのあなたから、霊の体に生まれ変わり、日々新たに生きるあなたにほかなりません。そして、これは正に9月18日に引用した部分ですが、ウイリアム・ジェイムズは同じ『宗教的経験の諸相』という書物の中で、人間を「一度生まれ」型と「二度生まれ」型という二類型に区分していました。人間には生まれ変わる人と、生まれ変わらない人とがいるというのです。いくら宗教教育を施しても、生まれ変わらない人は生まれ変わりませんから、ジェイムズの言うことは一理ありそうです。そして、生まれ変わらない人は、人生に何の問題も観じていない場合が多いのではないでしょうか。しかし、私は思うのですが、人生に何の問題も感じない人など、結局いるはずがありませんから、イエス・キリストの福音は、いずれ人が苦悩の状態に陥ったとき、きっと働くに違いありません。その時、人は、トルストイのように、生まれ変わりを経験するに違いありません。人は皆、本日お読みしたコリントの信徒への手紙一　15章の43節にあるごとく、「蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです」。

ですから、皆さん、教会は人々を暖かく大歓迎しなければならないのです。私たちは神様から全てを赦して頂いて、大歓迎して頂いているのですから、人を大歓迎したくないはずがないのです。この教会にも少しずつではありますが、新来会者が礼拝に出席されていることは、誠に喜ばしい限りです。新発会者が礼拝に出席して、心の安らぎを得られる様に、無牧の中でも教会員の皆で支えていく努力をお願いしたいと思います。世の中で居場所を失い、大歓迎されることのない人々が、この西福岡教会の近辺に沢山おられるに違いありません。イエス様がその方々を、どんなにものすごく大歓迎しておられるかを、この

教会員全員で示させていただきたいものです。そして、イエス・キリストの大歓迎に出会うと、人はきっと生まれ変わるに違いありません。

祈り　神様、あなたが召し集めて下さいました御教会で、今日も恵まれて説教させていただきましたことを感謝致します。御教会のかけがえのない信徒の方々、求道者の方々の主にある交わりをこれからも祝福してくださいますようにお願い致します。この祈り、主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げ致します。アーメン。